

熊野水軍小山家文書の総合的研究

期間：2018年4月1日～2021年3月31日

[代表者] 坂本亮太（和歌山県立博物館）

[共同研究者]

北野隆亮（和歌山市和歌山城整備企画課）

呉座勇一（国際日本文化研究センター）

佐藤純一（白浜町教育委員会）

白石博則（和歌山城郭調査研究会）

藺部寿樹（山形県立米沢女子短期大学）

高橋 修（茨城大学）

春田直紀（熊本大学大学院）

弓倉弘年（和歌山県立桐蔭高等学校）

関口博巨（日本常民文化研究所）

共同研究「熊野水軍小山家文書の総合的研究」を終えて

研究代表者 坂本 亮太



写真1 勝山城より安宅本城を臨む

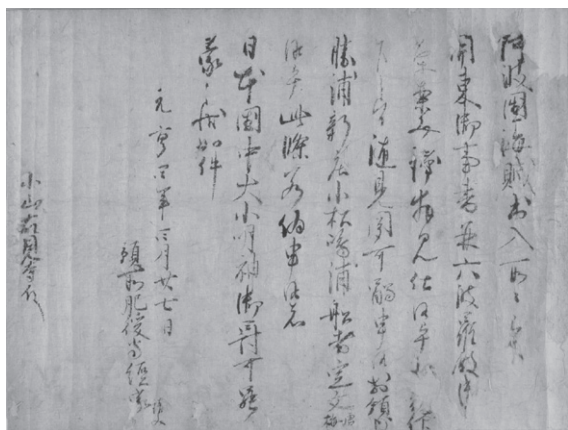


写真2 新田経家請文案
(久木小山家文書 和歌山県立博物館蔵)

1. 共同研究の概要

近年、これまで所在不明とされてきた紀州小山家文書の再発見が相次いでいる。そのため、小山家文書の整理と公開、さらには各小山家文書の集成と総合的な研究が求められている現状にある。網野善彦氏は既に「西向の小山家文書に、久木の小山家、さらに神宮寺、二部の小山家まで加えて総合的に研究を進めるならば、阿波国まで含む熊野水軍の実態をより鮮明にすることも可能と思われる」と先駆的に述べる⁽¹⁾。西向小山家文書を調査・公開した神奈川大学日本常民文化研究所が蓄積する成果も活用しながら、近年現地で大きな成果があがっている城郭史・考古学と協業することで、熊野水軍（紀南・熊野の武士）の動態と紀伊半島・紀伊水道海域史を学際的に解明することが、本共同研究の大きな目的である。

2. 成果としてのフォーラムと報告書

2020年度は、2年間にわたる共同研究の成果のとりまとめとして、成果報告書作成と共同研究フォーラムの開催をおこなった。

当初は2020年9月に神奈川大学でフォーラムを予定していたが、新型コロナウイルス（COVID-19）の影響もあり、時期をずらして年

度末（2021年1月23日）にオンライン（Zoom）によるフォーラムを行うこととなった。本来であれば、フォーラムを開催し、参加者等と議論を交わしたうえで報告書をまとめていく予定で考えていたが、フォーラムの時期・形式ともに大きく変更を余儀なくされた。事務局とも方法等を模索しながら開催準備を進めたこと、報告書編集作業中であったこともあり、参加者に資料を配付しないなど不便をかけたことは大きな反省点である。ただし、オンライン開催であったことも背景にあつてか、予想以上に全国より多くの参加者（75名）があつたことは大きな収穫であった。

また、フォーラムと同時進行で報告書の作成もおこなった。こちらも新型コロナウイルスの影響で図書館が閉鎖されるなど、思うように執筆活動を行うことができず、資料の収集等試行錯誤しながらの作業を余儀なくされた。その結果、入稿もだいぶ遅れ、校正自体も充分に行うことができなかった部分があり、資料集としては不十分なものとなってしまった点は否めない⁽²⁾。ただし当初は300ページ程度のものを予定していたが、各共同研究者の力作が寄せられたこともあり、357頁と大幅に超過する結果となった。事務局には多大な迷惑をかけることになったが、その分成果は大きなものとなったと前向きに捉えたい。内容については、報告書を是非手にとって参照いただきたい。

3. 共同研究の成果と課題

本共同研究における最大の成果は、何といても熊野の海域史について、ほぼはじめて学際的・総合的に検討したことであろう。これまでその重要性のわりにあまり顧みられることのなかった中世熊野の海域史について、基礎となる資料紹介・集成をおこなったほか、考古学・文献・城郭史からさまざまなアプローチすることができたうえ、その比較材料なども提示することができた点は大きな成果と言って良いと自負している。このようなかたちで共同研究を進めていたこともあり、本報告書以外にも成果報告をする機会を得、各地・各分野の研究者と交流を持てた点も個人的には大きな財産となった。例えば、2019年夏（8月25日）には軍記・語り物研究会で



写真3 第7回共同研究フォーラムチラシ



写真4 Zoom画面（総合討論時）（2021年1月）

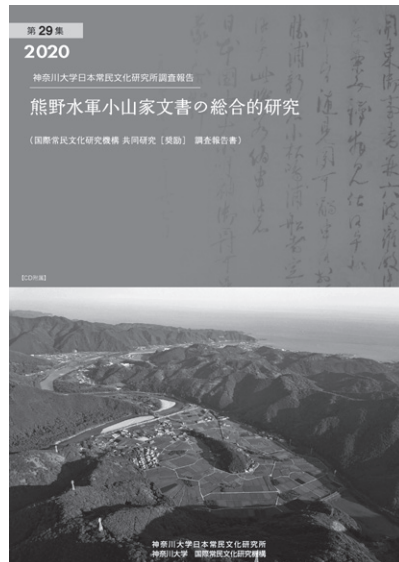


写真5 成果報告書 調査報告書第29集（2021年3月）



写真6 和歌山県立博物館での文書調査（2018年11月）



写真7 安宅氏城館跡の見学（2018年11月）



写真8 安宅本城跡遺物調査の様子（2019年2月）

のシンポジウム「紀南の海と中世の戦乱」⁽³⁾、2020年夏（9月26日）にオンラインで行われた和歌山地方史研究会・紀伊考古学研究会の合同研究会「躍動する熊野の武士団—その本拠と特質を探る—」⁽⁴⁾、2020年秋（10月11日）に愛媛県今治市で行われた日本海賊会議⁽⁵⁾などがある。各地・各分野の研究者が、熊野の海域史や小山家文書の事例を求めていることの表れともいえよう⁽⁶⁾。

このような共同研究の成果発信についてはもちろんのこと、今回の共同研究においては、その基礎となる、文献・考古・城郭のそれぞれの資料を集成することができた点も大きな成果である。このような基礎資料を学界や地元に対して、提示と共有を行うことができた点は、今後の研究の土台となるものであろう。これから、熊野の海域史が本格的に検討されることになるのではないかと期待している。

さて、以上のような成果がある一方で、残された課題も当然のことながら多く残されている。例えば、この共同研究において基礎資料の提示を行うことはできた反面、共同研究の軸でもある小山家文書を用いた研究を十分に展開することができなかった点は挙げねばなるまい。利用するための最低限の環境を調えることはできたが、各共同研究者とも本格的に小山家文書を用い、検討した論文を執筆することができなかった点には大きな課題が残った。また今回、学際的に共同研究をおこなったが、各分野の成果が提出されたのみで、それぞれの分野での成果を持ち寄り、各分野間で徹底した議論を交わして、共通する歴史像・地域像の構築・提示には至らなかった点も大きな課題として残った。

そのほか、これまでその重要性のわりにあまり顧みられてこなかった熊野の海域史を取り上げて検討したものの、その特徴などを十分に描ききることができなかった点も課題である。そういった問題点を克服するうえにおいて、①熊野三山との関係性⁽⁷⁾、②他の海域（瀬戸内や伊勢など）との比較・交流、について検討すべきだと考える。当初は紀伊水道や阿波との関わりを視野においていたが、思っていたほど関係資料は見つからず、その相互交流については、明確なビジョンをもったさらなる追究が求められる。あらためて熊野の海域の特徴を浮かび上がらせるような視点が必要だろう。

以上、簡単なが本共同研究の総括をおこなった。網野氏が提言したことを受けて始めた共同研

究ではあるが、どこまで氏の視野と展望に応えられているだろうか。熊野の海域史に関する学際的な研究は緒についたばかりで、この共同研究の成果・報告書をもとに、さらなる研究が進み、議論が活発化することを期待したい。その呼び水となることができるならば、本共同研究の意義はあったというべきだろう。

【注】

- (1) 網野善彦『日本中世史科学の課題——系図・偽文書・文書——』（弘文堂、1996年）。
- (2) 報告書刊行後に気がついた補訂すべき点を記しておく。
 - ① p.190 下段 18～19 行目
「義澄一基家・義英一湯河（少弼）・野辺氏・目良氏と、義植一尚順一（湯河政春・光春）・山本氏・愛洲氏」としたが、誤りのため、「義澄一基家・義英一湯河（少弼）・山本氏・愛洲氏と、義植一尚順一（湯河政春・光春）・野辺氏・目良氏」と訂正したい。
 - ② p.250 八五 修理亮知行宛行状
誤りではないが、「阿波国佐任」は阿波国助任郷を指すものと思われる（『徳島県の地名』）。助任郷は阿波富田荘内の郷で、現在の徳島市に比定される。周参見氏が阿波国吉野川河口部の所領を宛がわれていた事例と位置づけられる。
 - ③ p.272 一四〇（神保カ）長則書状・
p.273 一四一（神保カ）長則書状
「長」の通字から神保氏かと可能性を示したが、川口成人氏により羽賀氏の可能性が提示された（川口成人「室町期畠山氏被官「国久」の活動と比定」『京都学・歴彩館紀要』4号、2021年）。
- (3) 『軍記と語り物』56号（軍記・語り物研究会、2020年）。
- (4) 『紀伊考古学研究』24号（紀伊考古学研究会、2021年）掲載予定。
- (5) 『中世日本の海賊と城Ⅲ 日本海賊会議』（村上海賊魅力発信推進協議会、2021年）。
- (6) そのほか、小山家文書を活用し、戦国期の周辺武士を取り上げた成果もある。拙稿「紀州山本氏の地域展開」『史料編』（『山本氏関連城館群総合調査報告書——上富田町龍松山城跡、坂本付城跡発掘調査報告書——』上富田町教育委員会、2021年）。
- (7) 那智山との関係については、拙稿「中世後期熊野那智山膝下の地域構造」（『2020年度三重大学戦略的機能強化プロジェクト「紀伊半島創生のためのOnlineによる新たな研究・教育実践体制の構築」報告書 熊野のよみがえり——三重・和歌山の挑戦——』研究代表者 三重大学教育学部・大学院地域イノベーション学研究所教授 藤田達生、2021年）で触れた。あわせて参照いただきたい。



写真9 軍記・語り物研究会シンポジウムの様子
(2019年8月)



写真10 神奈川大学日本常民文化研究所での会議
(2019年6月)

■ 2020年度の活動

- 第7回共同研究フォーラム「中世熊野の海・武士・城館」（オンライン開催）2021年1月23日 坂本亮太・佐藤純一・北野隆亮・村上絢一（京都大学大学院博士後期課程・大阪経済法科大学非専任講師）・白石博則・呉座勇一・藪部寿樹・高橋修・春田直紀・弓倉弘年
- 『熊野水軍小山家文書の総合的研究』[CD 附属] 神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第29集（国際常民文化研究機構 共同研究〔奨励〕調査報告書）2021年3月26日